

機関番号：31302

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720196

研究課題名 (和文) 15世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観・イスラーム観—記憶と経験—

研究課題名 (英文) The Pilgrims' View on the Crusade and the Islamic World in the 15th Century: Memory and Experience

研究代表者

櫻井 康人 (SAKURAI YASUTO)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：60382652

研究成果の概要 (和文)：本研究では、後期十字軍を再考する一環として、より具体的には十字軍熱が集合心性としてヨーロッパ世界に定着していたのかを探るべく、15世紀の聖地巡礼記の分析を行った。考察の結果、15世紀になると安全に「麻痺」した巡礼者たちの中にムスリムに対する敵意が表面化したこと、およびオスマン帝国のバルカン半島進出という状況の中で巡礼者たちが「十字軍」という用語を用い始めたこと、すなわち15世紀後半における「十字軍」は聖地回復ではなく対オスマン帝国を意味したことなどが明らかとなった。しかし、ヴェネツィアとオスマン帝国との和平 (1479年) により安全な聖地巡礼が確保されると、聖地巡礼者たちの心の中において再び「十字軍」熱が冷却していく傾向が見られることも確認された。

研究成果の概要 (英文)：In this study, in order to reconsider the Later Crusades, especially to consider whether the hope for the Crusades had been as the shape of the collective mind in Europe, the analysis of the Pilgrims' texts in the 15th Century has been done. The result of the study makes it clear that the enmity to the Muslims came to the surface in the mind of Pilgrims because of the 'paralysis' for the security, and that, under the condition of the advance of the Ottoman Empire into Balkan, Pilgrims began to use the term of the 'Crusade', that is, the term mean not the hope for the recovery of the Holy Land, but the war against the Ottoman Empire in the last half of the 15th century. On the other hand, it is also revealed that the truce between Venezia and Ottoman Empire (1479) gave the Pilgrims the security so that the hope for the Crusades was cooled down again.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	510,000	3,010,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史・中世史・十字軍・聖地巡礼・イスラーム

1. 研究開始当初の背景

私は、課程博士論文作成に至るまでは、中でも十字軍国家 (エルサレム王国) の権力構造に焦点を当てて研究を行った。J・ラ・モ

ントが「純粹封建制論」を提唱して以降、諸研究者は王権と貴族権の強弱関係のみに焦点を当てた考察を行っていた。それに対して、私は国王・貴族関係の枠組みに囚われないこ

とこそがエルサレム王国の権力構造の理解に繋がるということを提示し、封建主従関係外要素、具体的には騎士修道会・ブルジョワ・高位聖職者が王国権力構造の中でいかなる役割を果たしたのかを考察した。そして最終的には、封建王国と聖地防衛国家の二重性という、従来にはない新たなエルサレム王国像を提示することができた。このように、エルサレム王国の権力構造という点においては結論を得ることができたが、エルサレム王国史研究を進める中で、シリア・パレスチナ地域におけるキリスト教徒とムスリムとの関係という点にも関心を持つようになった。そこで行ったのが、聖地周辺域における托鉢修道会士の活動に関する研究である。B・アルタナーを始めとする従来の研究者たちは、托鉢修道会士たちによるミッション活動を十字軍活動と二項対立的に捉えていたが、F・カルディーニといった近年の研究者は、ミッション活動がその根底において十字軍精神と不可分に結びついていたことを提示している。だが、いずれにせよ、東方世界における托鉢修道会士の活動の実態が分析されることはなかった。そこで、私は証書史料を中心に、書簡史料・年代記史料などを援用して、托鉢修道会士の活動の実態を解明しようと試みた。考察の結果、13世紀半ばを境に托鉢修道会士の活動がムスリムに対する改宗の促しからキリスト教徒に対する回心の促しへと転換したことが明らかとされた。その背景には、ムスリムからの攻撃により十字軍国家の維持が困難となった状況において、彼らの目的がキリスト教圏の拡大からその防衛へと転換せざるをえなかったことがあったのである。とりわけ、聖地国家滅亡時に聖地巡礼を主たる目的として東方世界を訪れていたドミニコ会士、リコルド・ダ・モンテ・ディ・クローチェにとって、十字軍はもはや絶望的なものにすぎず、ムスリムからキリスト教圏を防衛するには「愛」を中心とするキリスト教的美徳をキリスト教徒たちの中に復活させるしかなかったのである。ここで得られた結論の一つである、リコルドの十字軍への絶望感というものが、本研究の主題である後期十字軍研究を行う背景となっている。

2. 研究の目的

本研究では、15世紀に作成された聖地巡礼記を網羅的に分析し、そこから十字軍観・イスラーム観に関する情報を抽出し、その情報を聖地巡礼記全体の文脈で問い直すことによって、ヨーロッパ世界ではいかなる十字軍観・イスラーム観が見られたのか、およびその変遷を見ることを主たる目的とする。これまでに申請者が行ってきた14世紀の聖地巡

礼記の分析では、いかなる者が聖地回復熱を持ったのかについては見解を提示することができたものの、逆にいかなる者が聖地回復熱を、少なくともその作品中に示すことがなかったのか、その理由となるべき背景について見解を提示するにはいたらなかった。その理由としては、作品数の問題がある。「聖地巡礼の黄金期」とは言っても、14世紀に作成された旅行記全70作品の内、聖地巡礼記は31作品に過ぎなかった。しかし、15世紀に作成された旅行記の数はその2.5倍にも上る。従って、データが多い分、より詳細な分析を行うことが可能となる。その上で、最終的には14～15世紀の聖地巡礼記を総合的に見て、十字軍観・イスラーム観の差異、その社会的・地域的・時期的特質、およびその原因となる背景を明らかとし、後期十字軍像のより正確な把握に迫る。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下の通りである。まずは内容および人称に基づいて網羅的に分析した上で、旅行記を5つの系統(①メモワール、②旅行書、③創作、④聖地巡礼記、⑤巡礼ガイド)に分類し、聖地巡礼記およびその補助的史料として巡礼ガイドに検討対象を限定した。次に、それぞれの作品について、作者の出身地・出自・旅程などの基本情報を整理した上で、各作品から十字軍観(過去の十字軍に対する記憶・追憶的記述、および経験としての聖地の現状に対する感情)やイスラーム観(クルアーンやムハンマドに関する情報をどのように伝えようとしているのか、および経験を通じてのムスリムに対する感情の変化の有無)に関する情報を抽出した。その上で、このような情報を記す者、および記さない者との間にどのような地域的・社会的・時代的傾向が看取できるのか、それらが意味することを巡礼記全体、ひいてはヨーロッパ社会全体の文脈で可能な限り問い直した。

4. 研究成果

本研究では、後期十字軍を再考する一環として、より具体的には十字軍熱が集合心性としてヨーロッパ世界に定着していたのかを探るべく、15世紀の聖地巡礼記の分析を行った。考察の結果、15世紀になると安全に「麻痺」した巡礼者たちの中にムスリムに対する敵意が表面化したこと、およびオスマン帝国のバルカン半島進出という状況の中で巡礼者たちが「十字軍」という用語を用い始めたこと、すなわち15世紀後半における「十字軍」は聖地回復ではなく対オスマン帝国を意味したことなどが明らかとなった。しかし、

ヴェネツィアとオスマン帝国との和平（1479年）により安全な聖地巡礼が確保されると、聖地巡礼者たちの心の中において再び「十字軍」熱が冷却していく傾向が見られることも確認された。

近年の後期十字軍研究が、13世紀末に十字軍が終焉したというかつての学説に対するアンチテーゼを出発点としているために、ヨーロッパ世界における「十字軍」熱の高揚をただただ強調する傾向にある。これに対して、本研究の成果の持つ大きな意味は、とりわけ巡礼者たちの十字軍観・イスラーム観は聖地の状況に大きく左右されるものであり、直線的に発展・増大していくものではなかったこと、および15世紀後半には「十字軍」が聖地回復ではなく対オスマン帝国を意味したこと、の二点を明らかにできたことである。

この成果を踏まえると、当然のことながら次なる課題は、宗教改革・オスマン帝国による聖地支配・同帝国によるヨーロッパ侵入の激化などを経験する16世紀前半について、引き続き分析を進めていくことである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 櫻井康人、1450～1480年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考(4)—、ヨーロッパ文化史研究、査読有、12号、2011、179-227
- ② 櫻井康人、「帝国」としての「キリスト教国」—普遍教会会議決議録における平和と十字軍の言説—、東北学院大学論集 歴史と文化(旧歴史学・地理学)、査読無、46巻、2010、55-88
- ③ 櫻井康人、騎士修道会と curia regis—前期エルサレム王国構造に関する一考察—、東北学院大学論集 歴史と文化(旧歴史学・地理学)、査読無、45巻、2010、75-89
- ④ 櫻井康人、12世紀エルサレム王国における農村世界の変容—「ナブルス逃亡事件」の背景—、ヨーロッパ文化史研究、査読有、11号、2010、181-215
- ⑤ 櫻井康人、15世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍・イスラーム・ムスリム観—後期十字軍再考(3)—、ヨーロッパ文化史研究、査読有、10号、2009、91-114
- ⑥ 櫻井康人、4～13世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム・ムスリム観の変遷、ヨーロッパ文化史研究、査読無、9号、2008、47-88

〔学会発表〕（計2件）

- ① 櫻井康人、「越境する人びと」—フランク人とムスリムとの結婚—（地中海学会第34回大会シンポジウム「フロンティア—周縁か中心か—）、地中海学会第34回大会、2010年6月20日、東北大学
- ② 櫻井康人、フランク人支配下のムスリム—『聖地のシャイフたちの奇跡的な行い』を中心に—、第77回西洋史読書会大会、2009年11月3日、京都大学

〔図書〕（計2件）

- ① 新人物往来社編、櫻井康人、他、新人物往来社、十字軍全史、2011、42-45・66-67・116-118
- ② 前川和也編、櫻井康人、他、ミネルヴァ書房、空間と移動の社会史、2009、53-100

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井康人 (SAKURAI YASUTO)
東北学院大学・文学部・准教授
研究者番号：60382652

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()
研究者番号：